

平成25年7月12日

意見書(1)

市民版 いちかわ子ども・子育て会議

主宰 川 副 孝 夫

《市民版の紹介》

「[子ども・子育て支援新制度](#)」の重要性を鑑み、「市川市子ども・子育て会議」に市民（当事者）の声を反映させ、全ての子どもの最善の利益を保障すべく、平成25年4月1日に「[市民版いちかわ子ども子育て会議](#)」を発足しました。（別添1）

子育て中の保護者、保育園の関係者、幼稚園の関係者、広場事業関係者、子育てネット関係者、ファミサポ関係者、手をつなぐ親の会、保育士養成校などの方が集まり、それぞれが市川市において、どのような子ども子育て環境をつくりたいか！それぞれが繋がってどのような貢献ができるのか、互いに期待して集まっている会です。

《子ども・子育て会議への意見》

1. 市川市が把握している現状や、今後の見通しに関する情報提供をお願いしたい。

市川市保育計画書、待機児度の経過と今後の見通し、今後の新設保育園の計画、株式会社を含めた経営主体。財政負担の状況

2. 勉強会の開催のお願い

「[子ども・子育て支援新制度](#)」を理解するのは、極めて困難です。審議の過程において、会議だけの説明では、不足する可能性があります。審議に支障をきたしてはいけないと考え、必要に応じて、任意の勉強会の開催をお願いしたい。

3. タウンミーティングの開催の提案

子ども、高齢者など世代を超えた声、子育て中の親の声、乳幼児や学齢期の児童に関わる関係者の声を直接聞く、自主なタウンミーティングを開催することを提案。

4. 課 題

- (1) 市川市の子ども・子育て支援事業計画が、「量」と「質」と「多様な新システム」の総合計画となることを望む。

(2) 教育と健康都市である市川市は、乳幼児時期からの教育・保育の重要性を鑑み、認定こども園の推進を図る。

- ① 幼保が共同して、認定こども園への移行を市川市は促進する。それを前提に計画を進める。
- ② 市長が、計画に基づき、認定こども園の認可を促進する。
- ③ 公私連携の幼保連携型認定こども園は、設置・運営主体は幼保連携による民間法人（公私連携法人）の設置を支援する。市は、当該法人と連携し、土地・建物など設備の無償又は廉価による譲渡・貸付けを行うことを検討する。
人員配置や提供する教育・保育など運営に市は関与し、適正な運営が行われるよう支援する。

(3) 施設型給付対象の施設を補完する地域型保育給付対象事業の推進を図る

育休が安心して取れる環境を緊急に保障するため、3歳未満児の小規模保育事業、家庭的保育事業、居宅訪問型保育事業、事業所内保育事業の推進を図る。さらに認可外保育所の認可への移行促進を図る。

(4) 一時預かり、特定保育、ファミリーサポートセンター、産後家庭ワンコインヘルパーなど地域子ども・子育て支援事業の推進を図る。

扶養の範囲内で働き、育児と仕事のバランスを取りたい家庭に配慮した計画を促進する。育児不安、育児困難な家庭に配慮した計画を促進する。

(5) 育児と職業との両立が図れる雇用環境の意識改革のキャンペーンを図る。

5. 子ども・子育て支援環境の目指すところ

○「量の確保と同時に質の確保を追求する街」

○「全ての子どもの最善の利益」と同時に「親の最善の利益」を追求する街

○「子どもに関わる保育教師等の安定した“雇用”と“給与”の保障される街」

○「親の就労等の有無の如何に関わらず子育て支援の充実が追及される街」

○「子育て家庭の経済的な負担の軽減を追及する街」

「市民版 いちかわ子ども・子育て会議」 ご案内

《会の趣旨》

市川市において、子育て中の親子にとって「こどもの最善の利益」を損なうことのない環境を築きあげていくことを目的とする。

幼児教育、児童福祉、子育て支援、養成学校等の関係者が参集し、それぞれの持つ力を縄ない、市川らしい「子ども子育て支援新制度」を確立していく行動をする。

《これまでの勉強会》

4 月 27 日「柏女霊峰先生を囲んで語る会」を開催

講師 柏女霊峰先生（淑徳大学総合福祉学部教授、内閣府子ども・子育て会議委員）

（要 約）

- 国の考えがベースとなり、市町村で計画を策定していくことがポイントとなる。
- その場合、支え合いの「緩やかな繋がり」が広がり、待機児童、産後の壁、小 1 の壁など障壁をなくしていく「切れ目のない支援」、すなわち「1 人の子どもも漏らさない」。障碍をもった子ども達などを受け入れられる仕組みがとても重要。
- さらに子どもの視点で、市民レベル・民間サイドでできることは何かを考えていかなければいけない。
- 子育て支援の視点で、育児の不安、虐待、DV など、母子生活の支援施設を含め民間の役割は重要であること。DV 支援などを明記していくことが大事であることが語られた。
- 市町村の独自財源を確保するために、独自の財源を生み出す工夫も必要性であることが語られた。

5 月 27 日「市民版 いちかわ子ども・子育て会議」を開催

講師：吉田正幸氏（幼児教育・保育専門誌「遊育」編集長）

（要 約）

- 地域の中で如何に子どもの環境を良くしていくのか、幼児教育、子育て支援をもっと充実するための手がかりを話して頂いた。
- 社会保障制度を見直す中で、子どもに光が当たった。子育て世代を健全にしないと日本の未来がない。常に次の世代のことを見据えて、少子化対策をしていかなければならない。
- 今までの少子化対策は、保育対策でしかない。本当は保育と仕事のふたつが必要だった。しかし、保育対策に力を入れた。延長保育を一番多くやった。しかし、働き方の見直しをして、残業をさせないという環境を作ればそのような問題はなかった。
働き方のひずみを保育が全部引き受けた。看護休暇や、育児休暇を取りやすい環境を作れば良かった。ワークライフバランスを考えた働き方に変えられるような制度が必要だった。
- 幼児教育を充実させないといけない。子どもの貧困問題、我が国 15.7%、16%近い。母子家庭の

貧困率は、5割を超えている。きわめて劣悪な環境にある。先進国では下から数えた方が早い。心身の健康の阻害、知的、学力が無い、貧困により、授業料払えない。就職できず、ワーキングプア。生まれ育った環境がたまたま、貧困であっただけで、貧困の負の連鎖が始まってしまう。

- 幼児教育があればかなり改善されるという米国の調査がある。幼児教育を幼稚園だけではなく、質の高い保育を提供するために幼保一体化、未来への投資。健やかな成長。お金を子どもに掛けてもっと恩恵を受けることが出来る、そういった背景の中でできた制度です。
- 品川区の中長期の見直し。地域商店街の活性化、防災対策、少子化対策等、全て関連して話し合った。それを反映した計画。こども子育て会議を議会にかけている。市川も広く、地域住民も関心を持って進められるように。
- こどもはどうやったら豊かに育つか、アタッチメントは大切、多様で豊かな関係性、同年齢異年齢、親以外の大人の関わりが必要である。それぞれがそれぞれの立場でどうやって関わっていく必要があるか。それをみんなで考えていくことが大切。私が考える子育て支援。
- どういう家族形態であろうと、母親が働いていない、いるに関わらず、障害があろうがなかろうが、全てのこどもに。インクルージョンの視点が必要。保護者をお客さん扱いしてはいけない、一緒に子育てを協力していく支援者として関わっていく。

さらに、保護者が地域と共に、インタラクティブな世界を作っていく。生きた関係にする事によって地域に貢献する。地域に重要な社会資源だと認めてもらわないといけない。地域に社会貢献していく必要がある。

《今後の計画》

○ シンポジウム

9月予定

「市川市の乳幼児の教育、子どもの育ち、親の支援、地域での支え合いの実際と課題」（仮称）実践者からの発題。参加者の声を集約し、市の子ども子育て会議に提言。

○ アンケート調査実施予定

世代を超え、国籍を超えた市民の声を聞く

○ ホームページの作成中

情報の発信、声を聞く・伝える

○ いちかわっこ WEB

<http://ichikawa.ikuji365.net/>

市民版会議の予告、情報の発信等

* 内閣府 子ども・子育て会議資料

http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/kodomo_kosodate/

《事務局》：E-Mail bunkozen@icnet.ne.jp FAX：047-336-2614

携帯：080-3389-8117 （事務局 幸前）

《お問合せ先》：風の谷保育園 園長 川副孝夫 電話 047-375-2700

E-Mail kazenotani@sunny.ocn.ne.jp

宮久保幼稚園 園長 吉原正実 電話 047-371-7320

E-Mail miyakubo-kinnder@pop14.odn.ne.jp

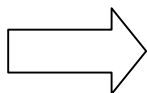
「子ども・子育てに関する」参加者のご意見

2013年4月24日（水）開催の「柏女先生を囲んで語る会」の参加者のフェイスシートとワールド・カフェで出たご意見より「子ども・子育てに関する」ことをまとめました。

ポイント1 まず理念が大切である

理念＝市川市の目指すところ・大切な事 とは…

- ・自己肯定感を育む
- ・失敗から学べる時間の余裕がある
- ・チャレンジ精神の生まれる場
- ・感性、想像力を育む土壌
- ・子どもが自分らしくいられる場
- ・子どもを中心にそして子どもを育てる親を中心に考えること
- ・理念を語れる（確認し合う）場



大人の利益ではなく
子どもの最善の利益

ポイント2 現状を把握する

- ・公園・プレーパーク等、理念実現につながる遊び場は有るか？
- ・地域社会のつながりは有るか？
- ・親の育ち、子どもの育ちの現状はどうか？
- ・子どもの持つ「生きる力」、親の持つ「育てる力」を施策が活かしているか？
- ・待機児童増加を生み出す環境は何なのか？
- ・子どもの声を聞いているか？子どもの声を代弁できているか？
- ・社会的養護の施策は取りこぼしなく入っているか？
（虐待、父子・母子家庭、貧困、ひきこもり等）
- ・子どもの成長を語るためにも、計画策定段階に教育関係者は入っているか？
- ・家族の生活基盤となる、就労関係（ワークライフバランス）の視点は入っているか？
- ・現在、市が目指している所はどこか？ 量なのか、質なのか？

ポイント3 自分たちのできること

- ・幼稚園、保育園が力を合わせれば待機児童も解消できるのではないのでしょうか
- ・子育てに悩んだとき、相談できる場としての幼稚園・保育園。そのための環境整備
- ・（子どもの権利を守るための）ネットワーク作り
- ・幼稚園にもできることはまだまだあります
- ・市民や各団体の持つ能力を活かす施策を考える

ポイント4 こうだったらいいのにな

- ・男性保育士が一生続けられる仕事として取り組めるような待遇改善
- ・やればやるほど赤字になる状況から、実態に合った計画・施策へ
- ・待機児童解消がメインになっているが、家庭で子育てしている人にも利用できる施策を
- ・妊婦さんからつながりを持てる環境と、大人になるまでの「人間形成」を念頭に置いた施策がきちんと作られている
- ・「子どもを産んでよかった」と思えるまち